

細かな作業を行う手先も若々しく

## 加藤ミキ子さん

Kato Mikiko 93 大東町



笑顔の連鎖がうれしくて  
手毬作りで衰え知らず

## あいな人 File\_25 いちのせきを愛する人

きめ細やかな模様の手毬、配色にこだわった折り紙飾り、細かな造形のつるし飾り。ミキ子さん宅の茶の間は、様々な手芸作品が展示会場よろしく飾られています。

ミキさんが手毬作りを始めたのは13年前。80歳のときに友人の佐藤淑さんから勧められたことがきっかけでした。

軽い気持ちで始めたものの、手毬作りは精密な作業。何度も失敗し、試行錯誤の末に矢羽根模様の作品を作りました。これは大変なことを始めてしまったと思う一方で、やり遂げた感動もひとしお。せっかく覚えたのだからと、同じ模様の手毬を続けざまに10個作りました。

1カ月に一種類ずつ、新しい模様を佐藤さんに教わりました。その度に10個ずつ同じ模様の手毬を作り、1年でおおよそ100個もの手毬を作りました。

手芸の延長として、折り紙飾りやつるし飾りなども手掛け、作品の総数は大小合わせると1000点以上。たくさんの作品を茶の間に飾っておくと、訪れた人から作品の出来栄を褒められるように。「良かったら」と手渡すと一層喜ばれます。その笑顔に元気づけられてきたのだと振り返ります。

「作品は欲しいという人にあげるの。喜んでもらえる顔が見たくて。つい。だから手元にはほとんど残っていないわ」と笑う。ミキさんの作品作りは家族の中でも公認の趣味。惜しみなく作品を差し出すので、孫の智弘さんが記録として写真集を作ってくれました。長女の豊子さんをはじめ、多くの手助けをしても

らっているからこそ続けられているのだと、家族の協力に感謝していました。

手毬は、もみ殻の入った袋を布と糸で球状にしたものが土台。伝承柄や創作の模様をかがり糸で縫い付けます。地道で根気のいる作業ですが「作り出すと止まらなくなる」ときっぱり。時間を忘れて、作品作りには打ち込む姿は、職人のように豊子さんも苦笑い。正確に寸分の狂いもなく作りこまれた作品の数々。もはや芸術の域。ミキさんの創作活動はこれからも続きます。

### Profile

1921年大東町生まれ。地元の高校を卒業後、盛岡に就職。結婚して、大東町で暮らしていました。2001年に創作活動を開始。以来、13年間、手毬を中心に作品づくりに打ち込む。週に1度利用しているデイサービスの会場でも、他の利用者と共に作品作りを楽しんでいます。

### COVER STORY

照り付ける真夏の太陽  
8月5日に36.9度を記録



### Postscript

気象庁によれば、1981~2010年の8月平均最高気温は29.1度。平均気温は24度です。

8月5日は青空が広がり、一関市竹山町の観測所では今年最高となる36.9度を記録しました。

一関水泳プールでは、夏休み期間中の子供たちや家族連れで、連日にぎわっています。「こどもプール」に設置されている2台の滑り台は子供たちに大人気。代わる代わる歓声を上げながら、勢いよく水面に飛び込みま

す。子供たちは夏の日差しをもらってもせず、真っ黒に日焼けしながら、水遊びを満喫していました。施設を管理する一関市体育協会の遠藤輝彦さんは、「雨で利用者が少ない日もありましたが、利用者数は昨年並み。夏ならではの施設なので、多くの市民に楽しんでもらいたい」と話します。一関水泳プールは9月7日まで利用できます。

**世**界に一つの国際研究施設「国際リニアコライダー」(ILC)の建設候補地の一関市。ILCが実現すれば、世界中の素粒子物理学や加速器科学の研究者らが、ここ一関に集うことになりま

まで減少する見込みです。そのうち、20歳~39歳までの若年女性人口は、2010年~40年の30年間で、半数以下になるといわれています。

若年女性人口の減少が続けば、合計特殊出生率(女性が一生で生む子供の数)が大幅に改善されても人口維持は困難です。

**子**育てが難しくなったといわれる今日、「子育てしやすいまち」の実現は急務です。市は、さまざまな子育て支援事業を展開しています。しかし、施策を打ち出しても、地域の協力がなくては「子育てしやすいまち」を実現することはできません。

子供が笑えば、家族が笑顔になります。子供の笑顔は、地域を元気にします。子供たちの笑顔は、家族にとっても、地域にとってもかけがえのない「宝物」です。未来を担う子供たちを育むことは、一関市の未来を育むことです。今、もう一度、ここで子育てについて考えます。

## 一関で **HUG** くむ しあわせ家族

**HUG** =抱きしめること



④から千厩町の千葉和人さん(32)、桜和子ちゃん(3)、仁花ちゃん(5)と仁美さん(33)家族